

先日、書店員さんと話をする機会があった。

いつも元気な方だが、その日はちょっと疲れているようだった。聞くと、その日発売された人気作家の単行本新刊について「文庫はないんですか」と訊かれたという。

ここで意外と一般の皆さまには曖昧に認識されている小説の販売形態について説明する。

まず四六判という判型の単行本が出る（表紙に固いボール紙を使っている本が多いことからハードカバーと呼ばれることもある）。小説における「新刊」とは概ねこの四六判単行本を指す。この単行本が二、三年すると文庫化する。

つまり、単行本の新刊と文庫が同時に発売されることは、イレギュラーな販売形態なのだ。

だが、コンパクトであり価格が安いことから、文庫を好むお客様も多い。書店員さんは「今日、単行本の新刊が出たばかりなので、文庫化は数年先です」と説明したが、なかなか理解してもらえず、最後はお叱りの言葉を賜ったという。

最初から全部文庫で出してくれたらいいのに、というご意見はよく聞く。それはお客様からすればごもつともだ。しかし、出版社側にも出版社側の事情があることをどうかご理解いただきたい。

一つの商品でできるだけ長く稼ぎたい・できるだけ利鞘のある商品売りたいというのが商業上のセオリーだということは、働いている人ならご理解いただけると思う。そして、出版業界もそのセオリーに則って動いていることは、他業種と同じだ。



絵・江口修平

未来への投資

有川 浩

「でも、最初は高い単行本で売って、後から安い文庫を出すなんてずるい」そう仰る方に思い出していただきたいのは、時間とお金は反比例するという資本主義社会における大原則だ。例えば電車。鈍行は安い。しかし、時間がかかる。移動に時間をかけたくない人は、特急を使う。つまり、時間をお金で買っている。「早さ」というサービスを受けようとする、その分お金がかかるのである。

本も同じだ。単行本は高いが、発売と同時にすぐ手に入る。文庫は廉価だが、手に入れるのは数年先になる。また、すべての本が文庫販売になったら、新人作家を育てられないという問題もある。

文庫は毎月膨大な数の新刊が出て、前月の既刊と否応なく入れ替えられる。無名の新人がわずか一カ月の間に実績を出すのはほぼ不可能だ。とても生き残れない。

単行本はもう少し融通が利く。文庫に比べれば毎月の発行点数が少なく、書店員や出版社の「この作品は長く売りたい」という思い入れが反映しやすいのだ。

未来への投資にはお金がかかる。それは出版業界も同じだ。どうかご理解いただきたい。作家も出版社も「早く読みたい」「単行本の形で手元に置いておきたい」と思っていただけのような素敵な本を、と鋭意努力しているの、それを汲んでいただければ幸いだ。

皆さんはご都合に合わせて単行本や文庫を選んでいただければと思う。あなたが新刊書店で一冊本を買ってくださるたびに、出版業界は未来へのご支援を賜っている。新たな人気作家が出ることに「自分が育てた」と大いに誇っていたきたい。

ありかわ・ひろ●高知県生まれ。第10回電撃小説大賞『塩の街 wish on my precious』で2004年デビュー。2作目の『空の中』が読書会諸氏より絶賛を浴び、『図書館戦争』シリーズで大ブレイク。その後、『植物図鑑』『キケン』『県庁おもてなし課』『旅猫レポート』で、4年連続ブックログ大賞を受賞。他著作に『三匹のおっさん』『阪急電車』『ラブコメ今昔』『海の底』『空飛ぶ広報室』などがある。

